

4) 疼痛と気圧および骨障害の治療に対する新しい考え方

福田 稔 (新潟県立坂町病院外科)
安保 徹 (新潟大学医動物学教室)

関節痛や腰痛は気圧が下降する時に増悪する。また骨障害例の腰痛や骨塩量は、カルシトニンとビタミンDによって治療されているが、これらは全て自立神経を介しコントロールされている事が判明したので報告する。

5) 新規開業の診療内容

三浦 宏二 (がん検診クリニック三浦外科)

平成7年4月20日に開業してから10月末現在までの外来カルテ数は685で、月に約100冊の割で増加しているが、33%は外傷等の整形的疾患である。胃内視鏡を185例、大腸内視鏡を265例(TCFは155例)に行い、胃腺腫を1例、大腸腺腫を48例、大腸癌を8例に認めた。10月6日に病棟をオープンして以来の手術および手術予定は、直腸癌に対するマイルス手術、低位前方切除術が各1例、乳癌に対する非定型的乳房切断術が1例、甲状腺腫1例、ラパコレ4例、ヘモ2例である。

勤務医時代よりも患者への責任感が増し、CTの読影などこれまで身を入れてこなかった分野の勉強も必要でなかなか刺激的だが、全国学会に参加できないのが辛い。

6) 乳癌2,800例の術後成績と治療方針

佐野 宗明・牧野 春彦
土屋 嘉昭・筒井 光広
梨本 篤・田中 乙雄 (新潟県立がんセンター外科)
佐々木 壽英

1966年から1995年6月まで約30年間の乳癌2,800例の術後成績を分析した。症例数はわが国における乳癌の自然増に比例して年々増加し続けてきたが、それは初期例の増加であった。この傾向は術後成績の向上とともに術式の縮小化をもたらした。術後成績を最も反映する予後因子は組織学的リンパ節転移(n)であり、腫瘍径(T)をはるかにしのぐ。しかし、術式の縮小化は従来のn分類を使いづらいものにしてきた。近年、nを局在でなく転移個数で評価し、0個、1~3個、4~9個、10個以上の群に分けるようになった。今回これにTを加え、Tを3.0cm前後に分けた分類で術後成績を検討

した。この結果、極めて説得性のある5群を設定でき、これらの過去の治療法を解析し、手術単独、経口制癌剤とホルモン剤の評価、進行例の時代別比較、PBSCT併用大量化学療法を採用した背景と実施計画などについて言及する。

7) 食道類基底扁平上皮癌の1切除例

小向慎太郎・山洞 典正
山本 智・藪崎 裕 (水戸済生会総合病院外科)
薛 康弘 (同 内科)
中村 光男 (同 内科)
岡 邦行 (同 病理)

症例は79歳女性。主訴は食思不振及び胸やけ。上部消化管内視鏡検査にて、胸部下部食道に隆起性病変とそれに接してルゴール不染帯部位を認めた。両者より扁平上皮癌の診断を得たため、非開胸食道亜全摘術を施行した。術後の組織診断では隆起性の病変部位は類基底扁平上皮癌と診断された。類基底扁平上皮癌は、食道上皮の基底層細胞類似の腫瘍細胞からなり、また本症例のように扁平上皮癌への移行像が見られることもある。この腫瘍は上皮下腫瘍形成を示すことが多く術前に診断できることは少なく、本症例も術前に診断がつかなかった。類基底扁平上皮癌はこれまで国内で数十例しか報告されておらずきわめて稀であるため報告した。

8) 食道癌手術症例の検討

鹿嶋 雄治・佐藤 鍊一郎
坪野 俊広・神田 達夫 (秋田組合総合病院外科)
吉野 友康
師岡 長 (もろおか医院)

1990年1月から1995年11月までの食道癌手術症例41例を検討した。早期癌は10例で再発例はなかった。進行癌は31例で、進行癌の2例にバイパス手術を行ったが、他の29例は切除可能であった。進行癌29例では、ステージ3、4症例が86.2%をしめたが、C-2、C-3症例14例のうち7例、50%が2年以上無再発生存しており、7例中6例はリンパ節転移陰性例であった。C-2、C-3の再発例は3例で、再発時いずれも16番リンパ節に転移を認めた。進行癌ではリンパ節転移陰性例に再発はなく、長期予後が期待できるグループと考えられた。